

## 国分千足町遺跡第7次調査 現場説明会資料

2013年1月19日 太宰府市教育委員会文化財課

### ◎今回の調査でわかったこと

今回の調査では、弥生時代中期（約2000年前）の竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟のほかに、柵や旧河川が見つかりました。旧河川には粘土が堆積しており、旧河川の土砂の堆積に混じって多くの弥生土器や石器が見つかりました。今回の調査では弥生土器より古い時代の物が見つかっていないため、この土地に人が住み始めたのは弥生時代中期（約2000年前）からだったと考えられます。周辺の福岡・春日・筑紫野などでは、この時代の竪穴住居跡が多数見つかりしていますが、この国分一帯で見つかる竪穴住居跡の数は、周辺地域に比べると少ないようです。

周辺では昨年日本最古の戸籍関連木簡が見つかりっていますが、今回の調査では木簡と同じ時代の物は見つかっておりません。

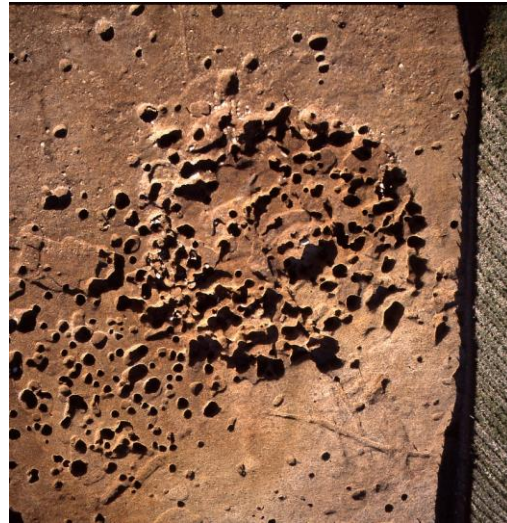


調査区東側  
(上が北)

### 【竪穴住居（たてあなじゅうきょ）】

竪穴住居とは、地面に円形や四角形の穴を掘り下げ、そこに柱を建て並べ、その上にカヤなどの草をかけて屋根とした建物です。縄文・弥生・古墳時代（約10000～1400年前）に造られていた建物のひとつで、平安時代まで造られていたところもあります。太宰府市では弥生時代～奈良時代（約2300～1300年前）の竪穴住居跡が見つかっています。

今回の調査では、新旧2棟の円形住居跡が重なりあって見つかっています。西側の住居①は直径10m前後で、上面が大きく削られ、深い穴しか残っていませんでした。東側の住居②は直径9m前後で、最初に地面を20～30cmほど掘り下げ、そこに新たな土を入れて床面を整えて、柱を建てています。その床面には多くの柱穴が掘られており、何度も建て替えたり、柱をすえ直したりしたものと考えられます。また、一部の柱穴の底には石を並べているものもありました。住居の中央には炉のような大きな穴があり、また、北西側には若干出っ張りがあることから、住居の入口と考えられます。



竪穴住居②(上が北)

### 【掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）】

柱を建てる所だけの地面を掘り、柱を建てて造られた建物で、柱穴は規則的に並んで見つかります。柱と壁で囲まれた室内は、床を作ったり、そのまま土間だったりすることもあります。縄文時代から江戸時代まで造られた建物です。

今回の調査では、2棟の建物が見つかり、そのうちの1棟の基礎には直径25cm前後の柱材が残っていて、柱の下には石が敷かれていました。



掘立柱建物①  
の柱材出土状況

### 【弥生土器（やよいどき）】

約 800℃前後で焼かれた土器で、今回の調査で出土した土器の 9 割近くが弥生時代中期の土器でした。旧河川に捨てられた土器の中に形がわかる土器がありました。ほとんどが破片でした。種類としては甕・壺・器台などがあります。

### 【黒曜石（こくようせき）】

黒曜石はガラス質の石材で、細かくたたいて、矢じりやナイフなどを作ります。福岡県内に産地はなく、周辺の佐賀・大分・熊本県などの黒曜石が使われています。今回の調査では黒曜石の破片が多く出土しました。矢じりなどの製品は少なかったのですが、竪穴住居の中からは黒曜石の破片が多く出土しました。ここの弥生人は住居内で石器を作っていたのでしょうか。

### 【石包丁（いしぼうちょう）】

石包丁は稲の穂先だけをつみ取る道具です。周辺で稲作を行っていたと考えられます。

あずき色の石包丁は、笠置山(かさぎやま、宮若・飯塚市)の凝灰岩(ぎょうかいがん)を使って、立岩遺跡(飯塚市立岩)で作られたもので、弥生時代中期に北部九州で流通しています。



### 【石斧（せきふ）】

木を伐採するための重量のある石斧で、太宰府市内で見つかる弥生時代の石斧のほとんどは今山(福岡市西区今宿)の玄武岩で作られた太型蛤刃石斧(ふとがたはまぐりばせきふ)と呼ばれるもので、弥生時代前期末から中期前半(約 2200～2100 年前)にかけて、福岡・佐賀・熊本一帯に流通しました。今回の調査では完全な形のものではなく、折れたものが捨てられたのでしょうか。